通らないといけない道

園長　野中　泉

10 月の終わりごろから 11 月の初めにかけて、アトムの 0 歳児、1 歳児クラスで、手足口病が大流行しました。もちろん、これまでも手足口病になる子は毎年何人かいましたが、どちらかというと夏の病気だという認識。季節外れであるばかりか、0 歳児クラスでは、13 人のクラスで罹らなかった子はふたりだけで、23 名の 1 歳児クラスでも、1・2 週間の間に半数以上が罹患するなど、学級閉鎖でもおかしくないような状況でした。しかも、これまでの手足口病よりも重篤な症状の子が多く、高熱が出たり、大きな水疱が重症で続けて「とびひ」になってしまった子も数人いました。園でも飛沫や便からの感染を予防するために、1 歳児のトイレトレーニングを一旦中断したり、おむつかえのシートを共有しないことやおもちゃの消毒を強化したりと対策をしたのですが、あっという間の流行をくいとめることはできませんでした。

そんな中、11 月半ばにこんなニュースが目にはいりました。それは、手足口病の全国的な大流行についての話題なのですが、専門家の見解では、昨年の新型コロナウィルスへの感染症対策の徹底が逆にこの流行をひきおこしているのはないかというものでした。徹底した感染症対策と自粛生活（他人と交わらない）で、毎年一定数はいる手足口病の患者が大幅に減ったことにより、十分な免疫を獲得していない子どもが多くなった。つまり、感染経験のない子が増えることで、このような爆発的な流行を引き起こしているのではないかという話でした。（少し前にやはり大流行した RS や感染性胃腸炎も同じこと）

改めて、いろいろと考えさせられてしまいます。子どもたちが成長する過程で経験することの中には、時には、この手足口病や胃腸炎のように、「その時」にはマイナスだとしか思えないような事柄も含まれます。嫌なことが実は、「その先」のためには大事な通り道であったりするということに、私たちはともすると、とても無頓着です。

もうひとつ、昨日の朝には、またとても辛いニュースが飛び込んできました。愛知の小さな中学校で 3 年生の男子が、学校内で同級生を包丁で刺し殺してしまったという事件です。たった 15 歳で突然奪われた命のこと、一瞬で人殺しになってしまった 15 歳の男の子のこと、双方の家族のこと。想像するだけで悲しみに息も苦しくなります。犯人となった彼は、普段はおとなしい生徒で事件直後、凶器となった包丁を持ったままその場に立ち尽していたそうです。「相手から、いやがらせを受けて嫌だった」という供述を警察ではしているなどの報道を聞きながら、小さな町で保育所からずっと一緒だったという彼らがそんな結末に行き着いてしまう前に、周囲のどんな助けが必要だったのか。子ども時代にどんな通り道を、通りそびれてしまったのか・・・。胸がえぐられるような思いで考え続けています。

昔、わらべうたの講習を受けたときに、参加者からこんな質問が出ました。「わらべうたには、例えば『だれかさんのうしろに、へびがいる～』と皆ではやしたてたり、はないちもんめで『あの子が欲しい』と人気を競わせるようなものもあり、子どもが傷つくのではないかと教えるのに抵抗があります。どう考えたらいいですか？」。すると、その講師の先生は、やさしくでもきっぱりとこう答えられました。「私は、むしろ、あそびを通して、子どもが『かすり傷』をおうことは、とても大事なことだと考えています。身体も心もです。ああ、擦りむいたらこのくらい痛いのだなとか、これは、こんなふうに悔しいのだということを、自分自身の心身でわかっていく経験を、大人は安易に取り上げてはいけないと考えています」。

アトムの保護者や、保育士の仲間たちと、今また、たくさん話したいことがあると思わずにはいられません。